

たまげたまな出会い

森山 欽司

大平さんは、自民党内では、池田さんのグループ　宏池会に属された方であり、私は三木さんのグループで、党内における立場は必ずしも一緒ではなかった。両派は政治情勢に応じて、時に近づき、時に相離れて転変したが、それにもかかわらず大平さんと私にはさまざまな出会いがあった。忘れ難い先輩である。

昭和三十五年十二月、池田内閣の時に、私は郵政政務次官を拝命した。初当選後、十年以上たっていたが、保守合同前の野党時代があり、また間で二回失敗していたので当選四回で初の政務次官だった。その時の官房長官が大平さんであった。池田内閣は「寛容と忍耐」を旗印とした内閣であったが、小金義照大臣の下で、私は当時の全通を相手に違法ストに対しては大量処分など筋を通す姿勢をもって臨んだ。大平官房長官には大変理解を得、支持していただき助かった。昭和四十八年十二月、私は田中内閣の科学技術庁長官を拝命した。大平さんは外務大臣だった。組閣直後の閣議の席上、新入りの私が核防条約の批准促進について異議を唱え、施政方針演説、外交演説の原案からその部分を削除することになり、大平さんにご迷惑をかけた。この時はまた、たまたま第一回オイルショックの直後で、世界中が驚き慌てている時だった。エネルギー問題を討議するために、アメリカの首都ワシントンで、主要国によるエネルギー会議が開かれ、外務大臣であった大平さんと科学技術庁長官の私が出席した。新米大臣の私は、ベテランの大平さんを何かと見習いながら、初めての大きな国際会議に参加し、世界の大物政治家にまじって緊迫したエネルギー問題を論じあつたことは、大変大きな経験だった。

昭和五十二年参議院選挙の時、栃木県地方区では、定員二名のところへ、自民党が二名を公認し非公認も一名で三名が立つ情勢となり、共倒れが取り沙汰されていた。自民党県連会長の私は責任を痛感した。故船田中先生のご意見をきくと、人物本位で三人のなかから公認の一人を重点候補とし、私が自ら事務長を引きつげるべきだということになった。こういう事態は異例のことであるので、私はさらに幹事長の大平さんに相談した。大平さんは私の立場を支持されたので一人の重点候補に全力投球、一議席を確保することができた。

昭和五十三年十二月から昭和五十四年十一月までの第一次大平内閣に、私は運輸大臣として再入閣した。その年の夏、大平総理の郷里香川県への初のお国入りには、私も閣僚として随行した。地元の喜びは大きく、大変なブームで、盛んな歓迎の光景が今も目にやきついている。ところで、十月の総選挙の結果は、三木内閣での選挙よりも自民党が一名減ということになり、大平退陣論がおこって、いわゆる四十日抗争ということになった。私は閣内にいながら、大平さんを積極的に支持する立場をとることができなかつたのは残念であつたが、その時に示された大平さんの粘り強さと底の知れない一面に舌を巻いた。

最後に、昭和五十五年の参議院選挙では、大平さんから労働省婦人少年局長をしていた妻の森山真弓の出馬をすすめられて当惑した。結局、妻は選挙に出ることになったが、その後思つてもいなかつた不信任案可決、解散、総選挙となつた。日頃の温容からははかり難い、大平さんのフアイトに目を見はる思いで、今更ながら大平さんの政治にかけた執念が尋常一様でないことを思い知らされた。衆参両院の同時選挙となり、私の場合はアベック選挙である。日本の選挙の歴史では初めてのこととなつて閉口した。さらにその間、大平さんご自身の急逝といふ全く思いがけないことが起り、大きな衝撃だつた。幸い二人とも当選することができたが、おかげで大平さんはわが家庭の中でも忘れられない人となつたのである。

(衆議院議員・第一次大平内閣運輸大臣)